



リビング・ウイル

日本尊厳死協会会報 季刊©

平成9年9月30日 発行

No. 87
SEP.1997

JAPAN SOCIETY FOR DYING WITH DIGNITY NEWSLETTER 死の権利協会世界連合加盟団体

アルツハイマー型痴呆の会員を見送る

A care report of an alzheimer patient, the member of JSDD, till his death

静かに日暮れへの旅

●入院からその日まで●

さわ病院院長・会員 澤 温



95年6月16日、私に診察を予約された老夫婦が来られた。夫が2年前から言葉を忘れたり、間違えたりし、93年12月に某病院に診断目的で入院し、すでにアルツハイマー型の老年期痴呆と診断はされていた。自宅で見ておられたが、どのように対応していいのかアドバイスがもらえないとのことと妻は困り、また当院がリビング・ウイル受容病院に登録された近隣の病院であるという理由で来られたのだった。

妻は在宅看護希望 デイケアへ通う

当院でも再度診断確定のため検査したがやはり同じ診断であった。症状は健忘が中心であり、それに伴い自分の思い通りにならないと怒りっぽく、時に妻に暴力を働くこともあった。前立腺肥大で市民病院に通院し、便失禁があり、入浴介助を要するが、徘徊もなく、更衣や食事はできた。そのため妻は在宅でできるだけ看たいとの意向であったので、当院の重度痴呆患者デイケアへ通所することとなった。96月1日に徘徊、不眠、興奮がひどく20日ほど短期入院をされたことはあったが、その後もデイケアに通所された。時に通所を嫌がられたが、なぜか担当医である私の声には素直になられたため、私の声をテープに入れてデイケアに誘ったこともあった。また昔一人でインドなどに旅をされた時の写真をお借りして、なじみの世界へ誘うなどの試みもした。

しかし96月4月ころから次第に歩行がしにくく、おむつの交換に協力を得にくくなり、しかもまずいことに妻に8月が右上肢を傷めたため、よくなるまで夫を入院させて欲しいと依頼があり、8月19日入院された。妻は毎日通い、いつも食事の時に付き添い、手足を

さすってやったりし、それへの本人の反応を喜んでおられた。

9月には妻の状態もよくなったが、娘、息子夫婦も妻のみの家庭介護では無理といい、市のヘルパーは週に1度しか来てくれないので役にも立たないとのことと、どこか老人病院をという勧めに考えておられたようであるが、自宅がすぐ近所でもあり、また現在の状況が通所の末のものでもあり、さらにリビング・ウイルを受け入れた病院と言うことで来院されたことでもあり、最後までお世話することとした。

反応が次第に低下 心肺蘇生はしない

入院前からC型肝炎があったが、9月から微熱が出たりし、薬物療法をしたが、肝機能が悪化したりして治療は困難であった。12月には誤嚥による肺炎も心配され、チューブ栄養も一時期として開始した。次第に呼びかけへの反応は低下したが、正月に息子夫婦、娘夫婦の協力で自宅への外泊もできた。孫が声を上げるとじっと見つめていたと喜んでおられた。

1月10日には自分の名を呼ばれた時にのみ反応していたが、次第に自分の名前を呼ばれても他人の名前を呼ばれても反応が変わらなくなり、妻も病状の進行を認めておられた。それでも孫がくると表情が違ふという。

私は夫婦で入会された尊厳死の話もフランクにしたが、94年11月に元アメリカ大統領、レーガンが言った「日暮れへの旅に立出する」夫を、妻は次第に受け入れられたと思う。まだ「数ヶ月以上はわたり」反応がない状態にはなっていないので様子を見ましょう、しかし、最後に心マッサージや人工呼吸器などの心肺蘇生はしないようにしようという合意はしていた。2月中旬ころから高熱が続き、

レントゲンでも片肺が真っ白、急性の肺炎であり、それに伴って体重も減少してきた。褥創ができてはあとは雪崩のようになるので、日暮れへの旅の途中で出会った夕立はなんとか切り抜けましょうと妻の合意を得て、2月24日、10日間のみ中心静脈栄養もすることになった。ちょうどその直前2月20日に、中国の鄧小平氏がパーキンソン病に肺炎を併発して亡くなられた。そのことも妻と話題にして、日暮れが夕立の間に来てしまうかも知れないということも話すと納得しておられた。

日暮れへの旅の 案内が病院の務め

3月7日朝、ちょうど様子を見に行った看護婦の前で静かな呼吸のうちに、5時50分、突然呼吸が停止し、医師は判定のみで死を確認した。私はあいにく出張で留守だったが、携帯電話に連絡が入った。しかしいつ日が暮れてもその時はここまでと言いつ残しておいたので、本当に静かな死をご本人もご家族も、見守った職員も迎えたと思う。ご家族は死後処置を自宅でするといわれたが、死後硬直もあるので、職員と一緒にすることをお勧めしたところ賛成された。その後自宅に静かに帰られた。職員にとっても本当に感激的な死であったと聞いている。

アルツハイマーと診断されたらすぐに尊厳死をという意見もあるようであるが、静かに日が暮れるようにお手伝いする、それがアルツハイマー型痴呆になられた方への医療、ケアであると思う。同時に家族に日暮れへの旅のナビゲーションをするのもリビング・ウイル受容病院のする務めであると思っている。

今回の経験が、本協会のアルツハイマー型痴呆と尊厳死の議論に、一つのヒントになってくれれば幸いである。